ベネズエラ国会議員選挙の結果と今後の展望

豊福 一郎

2015年12月6日に実施されたベネズエラ国会議員選挙は有権者の74%が投票に参加し、国民が寄せる関心の高さを示すものとなった。結果は野党・民主統合会議（MUD）が167議席中、112議席（3分の2）を占め勝利を収めた。これにより16年1月5日から発足した新国会では野党が主導権を取り、過去17年間にわたって与党・ベネズエラ統一社会党（PSUV）が立法府を支配して来た時代が終焉を迎えた。選挙から約3ケ月が経過してあらためて思うのは、選挙結果の意外性もさることながら、これだけ重要な意味を持つ選挙が大きな混乱も無く整然と実施され、与党には不利な結果にも拘らず最終的に透明性を保って公表されたことは、ベネズエラと言う国の文化度の高さを示す証左と言えるのではないであろうか。

選挙に至るまで

ベネズエラ国会は故ウゴ・チャベス政権下で制定された「1999年共和国憲法」により一院制となった。議員は比例代表と小中選挙区及び先住民枠の混合方式で実施される普通選挙で選出され、任期は5年間である。

前回の選挙は2010年に実施され、得票率は与党：46.7%に対して野党：45%と僅差であったが、議席数は与党：96に対して野党：64と大差がついた。これは与党支持者が多い地域は議員数が多く、野党支持者が多い地域は議員数が少ない選挙区割りになっていたためと言われるが、留意すべきは票数だけ見れば与野党にそれ程大きな差は無かったと言うことである。

13年3月5日にチャベス大統領が死去し、ニコラス・マドゥロ副大統領が暫定大統領に就任、同年4月14日の大統領選挙に出馬し、4月19日に正式に大統領に就任した。しかしカリスマ性と指導力を兼ね備えた前大統領が大統領がいなくなり、目に見えて政治経済が停滞したため、国民の不満が高まり、14年2月11日「青年の日」に大学生を中心として政権への抗議行動が始まった。カラカス市内のあちこちで道路が封鎖され、筆者のオフィスが面するフランシスコ・デ・ミランダ通りにも学生達がテント村を作り、通行が出来無くなるなど約3ケ月間にわたって騒乱状態が続いた。しかし5月8日にGNB（国家警備軍）がテント村を強制的に排除し学生達を連行した。これ以降、学生運動は下火となり目立った抗議行動は街頭から姿を消すこととなった。

14年10月に世界的な原油価格の下落が始まり、ただでさえ不調に喘いでいたベネズエラ経済は一気に悪化の道を辿る。14年の平均でバレルあたり88米ドルであったベネズエラ原油価格は15年平均で45ドルに下落、国の外貨収入は激減し、慢性的に食料や生活必需品が不足してスーパーには長い行列が見られるようになった。15年8月23日にはオリノコ河流域の都市サンクリストバルで物不足に抗議する住民が商店や銀行を襲う暴動が発生したが鎮圧された。11月13日か

選挙投票用紙

ら選挙キャンペーンが開始され、世論調査で与党支持率は20%を割っていたが、公務員や国営企業社員は「ひとり10票獲得」を目標に大々的な選挙運動を展開して巻き返しを図ることとなる。

これは余談であるが、ベネズエラの投票システムは日本よりも進んでいて電子投票である。但し、選挙管理委員会が準備した投票画面（写真参照）には数多くの政党が並んでおり、与野党の区別すら非常に難しい様である。例えば野党（MUD－UNIDAD）の横に似た様な名前の与党系政党（MIN－UNIDAD）が並んでいるなど有権者にとってはいささか紛らわしいこともあるようだ。

選挙日

2015年12月4日、夕方から7日夕方まで厳しい交通規制が事前に予告されていたこともあり、筆者の勤務する会社はオフィス・クローズして社員は自宅待機とした。食料と水を買い込んで4日間アパートに引き籠り外出は一切控えることとなった。今となっては何をして過ごしたかほとんど記憶が無いが、6日は朝からテレビの前に座り、ひたすら結果を待つこととなった。地上波テレビ局は全て国有化されているため、どのチャンネルも大統領の演説や与党支持者の映像ばかり流れていたが、投票所では人々が整然と列を作り混乱した様子も無かったので安心したのを憶えている。海外メディアではCNN en EspañolとCNN Chileが現場中継を行っていたが具体的な情報は乏しく、そうこうするうちに19時に投票締め切りとなった。日本の様な中間速報は無い。じりじりしながら待っていると、21時頃、とあるツイッター情報で与党:69議席、野党:95議席、未確定：3議席と言う速報が流れ、如何にもありそうな数字なので東京の本社に一報する。ところがこれはガセネタであった。その後ぱったりと情報が途絶えたが、実はこの間、政権内部で選挙結果をどのように取り扱うか大論争が行われていたと言う噂もある。深夜00時38分、選挙管理委員会が突如として与党:46議席、野党：99議席、未確定：22議席と言う第一回目の正式発表を行う。あまりの大差に驚愕、慌てて本社にレポートする。00時45分、大統領が結果を受け入れる演説を行い、街には野党支持者の歓声とともに一斉に花火が上がった。

なぜかかる結果となったか？

野党優勢と言う事前の世論調査結果にもかかわらず、与党は勝利を確信していたのでは無いだろうか。選挙前に政治とは無縁の一般のベネズエラ人と会話すると結局は与党が勝つだろうと言う意見が圧倒的多数であった。邦人同士で会話しても、仮に世論調査通り野党が過半数を取っても、結局は与党が勝つか大差はつかぬとの意見が多かった。それもベネズエラ経験の長い人ほどそのような意見であった。後日談では野党幹部ですらかかる大勝は想像していなかったと告白している。要すればあまりにも長期にわたって政権を支配して来たため、誰もが与党の勝利を疑わず、与党自身も油断した点は否めないであろう。

また、2014年頃に為替制度の一本化やガソリン価格の値上げなど有効な経済政策を講じていれば、今ほどひどい経済状況には陥っていなかったと思われるが、選挙が近づくにつれ国民の痛みをともなう政策が選挙戦に不利に働く事を懸念して身動きが取れなくなってしまったのでは無いか。結果として経済の悪化に歯止めが掛からず、さらに国民の支持を失うという悪循環に陥っていたように思われる。

与野党の政策差異

今のところ、野党から具体的な経済政策は提示されていない。もっとも、各担当大臣、中銀総裁、税務局長官などが国会の呼び出しに応じないのでは各分野の専門委員会も成立せず、従って国政についての正確な実態も把握出来ず政策の立案も出来ないだろう。

一方、大統領は1月15日に経済緊急令を発表し、1月19日には石油、化学、農業、鉱業、通信、建設、軍需、観光、産業等の主要分野に関する生産的経済国家評議会を設置、各大臣・次官と民間代表者が生産復興に向けた問題点を協議する場を国会とは別に設けた。これに対して国会は経済緊急令を否認するなどの応酬を行っている。つまり立法府と行政府が対立してデッドロックに陥っている。

＜今後の展望＞

このまま大統領と国会の対立が続けば、有効な政策の立案と実行はさらに遅れるであろう。大統領の任期は2019年1月までであるが、野党は大統領罷免に向けて動き出している。方法はレファレンダム（国民投票）や憲法修正などであるが、司法が公然と与党を支持して立ちはだかっているため、実現は容易でないと思われる。また、選挙結果に関してアマゾナス州（野党：3議席、与党:1議席）については無効と言う判決もあり、

野党が本当に絶対的多数（3分の2議席）を維持しているのか疑問視する向きもある。

ベネズエラの原油価格は1月末時点でバレル当り24ドルまで下落した。外貨収入の大部分を石油輸出に依存するベネズエラにとって財政的余裕は無く、デフォルトの懸念が指摘されている。仮にデフォルトを回避しても、生活必需品や基本的なインフラ整備に廻すべき外貨が枯渇しており国民生活への影響が懸念される。

未曾有の国難に対して今こそ国民が一致団結して立ち向かい、かつてラテンアメリカ一の先進国と言われたベネズエラの輝きを取り戻す日が来ることを願うものである。

（とよふく いちろう　前ベネズエラ三菱商事会社社長、
現在は、メキシコ三菱商事会社社長）

ラテンアメリカ参考図書案内

『1493 －世界を変えた大陸間の「交換」』

チャールズ・C. マン　布施田由紀子訳　紀伊国屋書店
2016年3月　811頁　3,600円+税　ISBN978-4-314-01135-8

コロンブス到来以前の新大陸の先住民の人口、優れた文明の起源、生態系との関わりを論拠に、新大陸には高度な文明はなかったとするそれまでの欧州中心の学説に反論した『1491―先コロンブス期アメリカ大陸をめぐる新発見』（日本放送出版協会 2007年）の続編。

コロンブスの到達によって、何十億年も前から互いに離れていた両大陸間で生態系が往来により交じるようなり、作物等植物や動物、病原菌、奴隷交易を含む人間が相互に移動し、大西洋経由、太平洋経由のいわゆる「コロンブスの交換」が始まった。アマゾン河下流域原産のタバコは世界的なブームを引き起こし、マラリアは地域社会を一変させ、サツマイモとトウモロコシは中国へ伝わり生態系に破壊的影響をもたらして王朝の盛衰に主要な役割を担った。アンデスからのジャガイモの伝播によってその後欧州で農業革命が起き、産業革命はブラジルからアジアに持ち出されプランテーション栽培となったゴムによって引き起こされた。1700年までに大西洋を渡った人びとの約90%を占めたのはアフリカからの奴隷であり、先住民との混血、欧州のみならず中国等アジアからの移住が盛んになって、世界の十字路ともいうべき両大洋のネットワークの統合を象徴するメキシコ市のような多人種・多言語の巨大都市が出現した。こうした「交換」は、現代もなお続いている。

新たに伝播したものは変容し、人びとは自分たちのニーズや状況に合ったものに加工する。人が住む地球のあらゆる土地が、1492年を境に変化を余儀なくされたのである。大航海時代15世紀以降の激動の世界を描いた壮大な歴史ノンフィクションだが、大部な割りには読み易く、知的刺激に富んでいる。　〔桜井 敏浩〕